

訃報②

日本トランスパーソナル学会の諸富会長によると、2013年4月29日午後5時頃（日本時間4月30日正午頃）、吉福伸逸さんが、ハワイのノースショアのご自宅にて、肝臓ガンのため永眠なさいました。69歳でした。ご病気が発覚してからわずか3週間という短さで、逝ってしまわれたとのことでした。

同学会の最新のニュースレター「吉福伸逸追悼号」には、関係者の皆さんの心のこもった追悼の辞がまとめて掲載されています。小生も吉福さんとは以前いろいろとお付き合いさせていただいたことがあるので、故人を偲んで少しだけ話させていただきます。

1982年に『クリシュナムルティの瞑想録』（平河出版）を出してから間もなく、本郷の事務所に吉福さんがデザイナーの青山さんと一緒にわざわざ訪ねてこられ、吉福さんとその関係者の皆さんが構想企画しているカリフォルニアを中心とした本の翻訳紹介などを含む事業に参加してほしいとのご意向を打ち明けられました。小生はあくまでもアマチュアであり、たいした知識も持ち合わせていないので、お役に立つかどうかわかりませんが、それでよろしければ喜んで手伝わせていただく旨お答えしたというふうに憶えています。

ともあれ、そのようにして吉福さんのグループの拠点であった阿佐ヶ谷の古い一軒家をしばしば訪ねるようになりました。そしてその頃、春秋社さんからクリシュナムルティの『生と覚醒のコメンタリー』の翻訳出版の依頼してくれた岡野編集長ともよく阿佐ヶ谷に同行しました。そしてこの本の装幀は青山さんが担当してくれました。

今回のニュースレターには吉福さんの書き下ろし本や、仲間の皆さんが関わった多数の邦訳書がリストアップされているのでざっと

拝見したところ、小生が関わったのはそのごくわずかでしかなく、改めて吉福さんの著作翻訳紹介企画が幅広い視野の中で展開されていたことがわかりました。吉福さんは阿佐ヶ谷の一軒家をベースにしたその活動においていやおうなしに中心的役割を担っていたものの、今から思うと大変な大仕事だったのではないかと思います。

その後、ハワイに移住されたことはとても吉福さんらしい生き方の一端を示していると思います。また、サーフィンをこよなく愛していたということも伝え聞いており、こちらから見るとまさに「悠々自適」の人生だと思われました。

その吉福さんの方が、「村の渡しの船頭さん」のように老骨に鞭打ちつつ本を出し続けている小生よりも先に旅立ってしまったわけです（ちなみに、小生は吉福さんと同じ歳です）。

「訃報①」でお知らせしたように、今年1月には、『氣に成る本』と『氣が分る本』を小社から刊行された藤森博明先生が突然お亡くなりになりました。享年61歳という若さでした。小生のまわりには無常の風がしだいに強く吹くようになり始めています。

ところで、今ちょうどデヴィッド・ボームの論考集『創造性について——新しい知覚術を求めて』の作業を終えたところなのですが、この本への「序文」を書いたレロイ・リトル・ベア（ブラックフット族という、アメリカインディアンの一部族出身の文化人類学者）は次のように述べています。

ブラックフット族の精神は、絶え間ない流転という考えのゆえに、創造性の宝庫である。もしも人が宇宙の規模で、または精神のレベルでこの流転を想像するとしたら、人は彼または彼女自身のことをサーファー——流転のサーファー——として想像するかもしれない。サーフィンしている間、人は波の流れと共に進んでいき、波と一体になる。人はすぐ周囲のものに集中することへと局限されずに、近くのものから遠くの地平線まで、あらゆるものを

受け入れる。流転に沿ってサーフィンする過程で、人はエネルギーの波のすべての異なった組み合わせを受け入れ、そして経験していく。それは抽象的に見え始めるが、しかし抽象的な芸術作品のようにではなく、動きと運動にあふれているように感じられてくる。視覚的には、エネルギーの波の踊るような動きは優雅で、美しく、北の方に揺らめいている光のように見えてくるのである。

延命治療を拒否し、おそらくはボームの言う「暗在系（秩序）」へとサーフィンするようにして流転していった吉福さんにこの一文を捧げたいと思います。

大野純一